

こんにちは♪ 梅雨つゆですね。雨が降っていますね。じっとりした季節になってしまいましたね。じとじと。ヤダなあ。北海道に移住したくなりますね（タメイキ）。せーやさんは本当に雨がキライでキライで（心まで湿ってしまうような気持ちになるからです）、梅雨で雨が続くと全身にカビが生えてしまうくらいユウツなのですが、みなさんはどうでしょう？ けっこう「私は雨が好き」というひとが女性には多かったです、驚かされたりするのですが。カエルは大好きなんだけどなあ。けるける。梅雨になくてもは困るもの。それは傘あじさいに紫陽花、そして本です。雨の季節は図書館へ。しとしと。

オススメ本紹介！

『メメンとモリ』 ヨシタケシンスケ

メメントモリ。「死を想え」「いつか必ず死ぬことを忘れるな」というラテン語の警句ですが、暗く重厚なそのテーマが、姉のメメンと弟のモリというふたりのキャラクターに分かれることで、深刻にはなくちょっと「死」（生きること）について考えてみようよという、いつものヨシタケ絵本になっています。3つのお話を収録。ひとつめは、モリがメメンのつくってくれたお皿を割ってしまいます。しょげるモリに、メメンは、「いいのよ！ だってどんなものでも、いつかはこわれたりなくなったりするんだから」と励まし、『『ずっとそこにある』ってことよりも、『いっしょに何かをした』ってことのほうが大事じゃない？』と問いかけるのです。わたしたちだって、ずーっとここにいるわけじゃないから。いつかは天国に行くのだから。だから、この世界にいるあいだは、好きなように生きればいいんじゃないかしら。ふたつめは、きたない雪だるまのお話。雪が少ないなかで、いっしょうけんめいつくった雪だるま。でもそれはきたなくてすぐとけてしまう。ボクはいったい何だったんだろうと雪だるまは考えます。3つめは、つままない映画を観てしまったメメンとモリ。この先もつままないことばかりだったらどうしようと不安になるモリに、メメンは「たのしくなくちゃいけないわけでも、しあわせでなくちゃだめなわけでもないんだよ」と諭し、人は「思っていたのとちがう！」ってびっくりするために生きているのだと語るのです。「思ったのとちがうから、世界はつらいし、きびしいし、たのしいし、うつくしい」。

『ラブカは静かに弓を持つ』 あだん 安檀美緒

本屋大賞2位の作品が、今年の読書感想文の課題図書に！ タイトルのラブカとは、古代魚然とした気味の悪い深海魚のことです。国内の音楽著作権を管理している全日本音楽著作権連盟、通称・全著連に勤務する橘は、業界最大手の音楽教室への潜入捜査を命じられる。とは言っても、スパイ映画のような活躍を期待されているわけではない。チェロの経験者であることを買われ、町の音楽教室に生徒として在籍し、ほかの生徒と同じようにレッスンを受け、教室で行われていることを明らかにしさえすればいいのだ。レッスン内で演奏される曲にも著作権料を徴収すべきだということが問題になっていた。期間は2年。内向的な彼にとっては、たとえ2年間通ったところで、特別な人間関係など築けようはずがないと思われた。チョコを弾く、ということだけがネックだった。自分がチョコに触れることは、もう二度とないと思っていた。チェロを辞めたのは、中1のときチェロ教室の帰りに夜道で誘拐されそうになったからだった。それ以来、ボックスカーに引き摺り込まれそうになる怖い夢を、やがては海の底のまっ暗い場所に連れ込まれる悪夢、深海の夢を見続けている。人好きのする腕の立つ講師に恵まれたせい、橘はレッスンを続けることができ、チョコを弾くのが楽しいと思えるようになり、もっといい音を響かせたいと思うようになる。予想に反し、講師との関係も深まり、チェロ仲間との交流にも参加するようになる。しかし、彼がそこでチョコを弾いているのは、そもそもスパイを試してみなを裏切るためだった…。

『夜空に浮かぶ欠けた月たち』 窪 美澄

精神科医の夫と、カウンセラーの妻が営む町の小さな心療内科「椎木メンタルクリニック」を舞台にした短編集。大学を出て東京でアパレルの仕事に就く。そんな夢を胸に東京の女子大に入学した瀧。ところが、同級生がみんな、おしゃれで、綺麗で、洋服にもメイクにもぬかりがなく、テレビに出てくる人のようだとすっかり気後れして、学校に行けなくなってしまう。働きたいと思っていたアパレルショップのバイトにすべて落ちて、仕方なく決めた昭和の遺産のような喫茶店でのバイトにだけは、容姿を気にしなくてもいいのでなんとか行けていたが、そのバイトですら不眠のせいで寝過ごしてしまう。あわてて店に行くと、店主は近くの心療内科のクリニックを紹介するのだった。病院に行くのは覚悟がいた。心を病んだ女の子は、キラキラしている女の子の真反対にいる。自分が心を病んだのだと認めたくなかったのだ…。「誰だってどこかが欠けているものなの」。

『木挽町のあだ討ち』 永井紗耶子

山本周五郎賞受賞作！ 睦月の晦日の雪の降る晩のこと。芝居小屋の裏通りを、唐傘を差した娘が一人。鮮やかな赤い振袖をのぞかせながら歩いていると、ひとりの大柄な博徒・作兵衛が邪な思いから声をかけた。すると、娘は唐傘を落とすとともに、ひらりと振袖を脱ぎ捨てて作兵衛へと投げつけると、白装束を纏った前髪の若衆姿に。年のころは、十五、六。雪のなかでもわかる白皙の美少年だ。「我こそは伊納清左衛門が一子、菊之助。その方、作兵衛こそ我が父の仇。いざ尋常に勝負」。仇討である。遠巻きに人垣ができるなか、一対一の堂々たる真剣勝負。体のまるで違う二人、菊之助が不利かと危ぶまれたが、白装束を返り血で真っ赤に染め、みごとに作兵衛の首を高らかに掲げた。これが世に言う「木挽町の仇討」。芝居ではなく、実際に成し遂げられた仇討である。その2年後、この仇討について聞きたいと若侍が訪れる。彼は菊之助から「事の次第やそもとの来し方など語って欲しい」と書かれた文を預かっていた。なぜ来し方まで？ かくして、芝居者たちの口から、あの仇討が、それぞれの波乱に満ちた人生が語られる…。「まあ何人聞いても同じことだよ。あれは立派な仇討だった。それだけのことさ」。

『ヨモツイクサ』 知念実希人

「その森には何かがいる」。本校でも大人気の知念さんの新作は、初の戦慄のバイオ・ホラー！ ヨモツイクサ。アイヌの時代から、「黄泉の森」は悪い神が支配している禁域であり、そこには黄泉の国の怪物、ヨモツイクサが徘徊していて、這入りこんできた人間を襲っては、生きたまま喰ってしまうのだと言い伝えられてきた。その黄泉の森が七年前に大手ホテル会社に買収され、その開発工事に携わっていた作業員6人が行方不明になる事件が起きる。神隠し。実は七年前にも、黄泉の森の近くで失踪事件があった。三人分の夕食が用意された食卓と、夜のニュース番組を流しているテレビ。そこから家族3人の姿が消えていたのだ。何の痕跡も残さずに消え去った前回とは違い、今回はあきらかにヒグマの仕業だと思われる形跡があった。敏腕の外科医で七年前に家族を失った茜は、仇であるアサヒというヒグマの凶行ではと追いかける男と同行する。ところが、アサヒは殺されていた。化け物のように巨大なヒグマよりも強大な「何か」がいるというのか!? ヨモツイクサ…。ここに帰ってくるのではと恐怖する茜の前に現れたのは、十代の少女だった。ヒグマの死体に馬乗りになると、剥き出しになった内臓に喰らいつこうとする。正気を失った少女と「何か」の関係とは…？

『最後の祈り』 薬丸 岳

教誨師。刑務所などで受刑者と話をすることで受刑者の心を安らかにする教誨を行う者。死刑囚が刑の直前に最後に語る存在でもあります。牧師である保坂宗佑は、千葉刑務所の教誨師をしていた。仕事ではなく、完全なボランティアである。彼は独身だが、名乗りを上げることのできない実の娘がいた。彼女の母親に対して犯してしまった取り返しのつかない罪を償うため、洗礼を受け神学校に通い牧師になったのだった。娘は幸せになっていた。会社の同僚と付き合い、子どもを授かり、結婚することを望んでいた。しかし、そんな彼女は25歳の連続快楽殺人犯・石原の餌食になり、殺されてしまう。「あんなに楽しい思いをしたんだから、この世に思い残すことなく、いつでも死刑になってやるよ」。公判の最中に終始薄笑いを浮かべ、ときには大仰にあくびをしたりする石原には、自分が犯した罪に対する反省も罪悪感も皆無だった。「死刑でかまわない」と言い放ち、実際に死刑判決が言い渡されると、「サンキュー」と高笑いする始末。今までは犯罪者を救うために祈ってきた宗佑は、石原を地獄に突き落としたいと願った。娘の無念を晴らすために、彼の教誨師を引き受ける。あの男に教誨することで、生きる希望を与え、生きたいと、もっともって生きたいと思わせたうえで、死ぬ直前に地獄に叩き落とす言葉を突き刺してやるのだ。

『ぼんぼん彩句』 宮部みゆき

俳句×小説！ ルックスのぜんぜん変わらない宮部さんは、好奇心も開拓心も旺盛で、また新しいジャンルを生み出しました！一つの俳句をタイトルにして、その句をもとにした短編小説を書くという試みです。もともと怖いもの大好きな彼女は、古今の数多の名作俳句を「怖い」をテーマにセレクトしたアンソロジー句集『怖い俳句』にぞっこん夢中になってしまい、十七音の俳句の世界にすっかり魅せられてしまったそうです。そこで、なじみの仲間たちと素人ながら俳句を作っているうちに、この短編集のアイディアが浮かんだのだそう。という成り立ちですから、選ばれた俳句はどれも怖い寄りです。たとえば。「枯れ向日葵呼んで振り向く奴がいる」「鉄利し庭の鶏頭刎ね尽くす」この2句からそれぞれどのような物語が立ち上がるのでしょうか？本のタイトルには、まだまだ俳句は「凡手」ですが、お菓子のボンボンのように繊細できれいで、彩り豊かな句を詠みたい、短編集もそうなりますようにという願いが込められています。

————— ヨシタケシンスケさんの「アイツ」が新しい仲間！ では、図書館で。